総合討論

加納寛・藤田佳久・松岡正子・増田喜代三・高木秀和・暁敏・ウリジトクトフ

（研究グループ②「大旅行調査」からみる近代中国像グループ）

加納　それでは、個々の発表者からの回答については、会場から先にコメントやご質問頂いた後にしたいと思います。会場の方で何かご質問やご意見ありましたら挙手をお願い致します。

質問者　今日はテーマが大旅行調査ということでしたが、私みたいな東亜同文書院について名前しか知らない人間にとっては、もう少し中身について知りたいと思います。例えば学習面についてですが、要するに3年間の在学期間におけるカリキュラムはどういうものだったのか。元々、貿易をやるために中国語をしっかり勉強して、買弁を通さずに貿易をやるという趣旨であったということですが、それについてどういう勉強をされたのかということを知りたいと思います。

それともう一つは、今日の大旅行の関係ですが、大旅行の実施にあたって準備期間はずいぶんかかったと思うんですね。ちょろちょろとできることじゃないですよね、日本の修学旅行と違いますから。どれぐらいの期間を準備期間にあてて、実際に実施したのはどれぐらいの期間だったのか。報告書をまとめることも考えると、トータルしたら1年ぐらいかかったんじゃないかという気がします。そうすると3年生の時は大旅行ばかりに関わったのかどうか、そのあたりについて聞きたいですね。

あともう一つは、そういう立派なことを成し遂げられて卒業された方たちの、その後の進路はどうなったのかということについて関心があります。今日のモンゴルに関する発表の時の発言にもありましたね。領事館に行った人がいたり、銀行員になった人、それはそうだろうと思います。もうちょっとデータ的なものがあれば、知りたいなと思います。よろしくお願いします。

加納　ありがとうございました。それでは質問だけ先に頂いて、また後で答えて頂きたいと思いますので、では馬場先生の質問を。

馬場　直接的には加納先生、松岡先生、増田先生に質問です。加納先生の場合は東南アジアを対象にし、松岡先生は四川、増田さんの場合は西南地域ですかね、雲南ということで、ある種の辺境地帯ということですが、私の質問は、例えばこのシンポジウムのチラシを見ても、これ藤田先生が作成された地図がもとになってますね。圧倒的に沿海部が多いわけですね。そういう中でなぜ書院生がこの地域を選んだのかということです。その相手はどういうふうになっているのかということを、どう考えたかということなんです。モンゴルのお二人の方は非常に明確なんですね。暁さんのものは35年としてですし、新疆の調査も日英同盟下のもとでいうことで、ある程度、背景が明確なんですね。そういう中でこの３名の方、加納先生は先ほど、雲南から何となく南下しちゃったんだという話ありましたよね。だから意図的にやったんじゃないんだと。他の地域もそうかということと、それから関連して、実は後の大東亜共栄圏の関係でいうと、支援のことの問題もやっぱり関連してくるんじゃないかなということをおっしゃってるわけですから。そもそも、だいたい沿海部を中心にやっていたのが、どうしてこの人たちが西北部、西南部、それから東南アジアに向かわれたのか、そこをどう考えるかという質問です。それからもし時間があったら、この第一グループのテーマが「東亜同文書院大旅行調査から見る近代アジア」ですから、それぞれの担当されたところから見て、近代アジアをどう見えるか、一言ご説明頂けたらと思います。藤田先生の場合は、例えば通貨圏がそれぞれ分裂してるとか、言葉が違うとか、軍閥の勢力範囲がそれぞれ違うとか、一言でいえば、まさに清末から近代中国というか、中華民国期まで分裂した中国ですよ。実態社会がですね。統合されてない、そういうのが一言で言えるのですね。あるいは、私はそういうふうに受け取れた。だからそういう点で、それぞれの方がなかなか今の段階では難しいとは思いますけど、何か一言で、各報告者から見て、大旅行調査から見る近代アジアというのは一言でこう見えると言って頂ければと思います。あるいは、近代中国、雲南、四川、内モンゴルでも結構です。一言で大旅行調査から見ると、例えば内モンゴル地区とか、こういうふうに描かれてる。あるいはそういう像として考えられるということでも結構です。これは司会の方、時間を配分して、最後にもし時間があったらお答え頂ければ、この第一グループのテーマに関連した部分が展開できるのではないかと思います。以上です。

加納　はい、ありがとうございました。その他いかがでしょうか。

武井　ちょっと細かな質問になるんですけれども、増田先生と高木先生にお尋ねしたいと思います。まず増田先生ですが、今回、12期生の雲南旅行班旅行ルートをグーグルを使ってトレースされました。それに関して、12期生以降も雲南地方に旅行したグループが幾つかあったと思いますが、そうしたグループと比較した場合、どの程度、今回ご報告であげられた12期生の旅行ルートと共通性があるのか、または全く共通性がみられないのかどうかといった点について、お尋ねしたいと思います。そして高木先生への質問ですが、「日本から上海に昆布を輸入する担い手となっていた昆布会社が日清戦争の時に解散した」というお話がご発表にあったと思います。こちらの予稿集58ページ目の右側の真ん中を見ると、「その後、昆布輸出は清国商人に牛耳られることになった」というふうに書かれてますが、それに関してお尋ねです。この清国商人の中には、例えば函館に住む在日華僑の商

人なども含まれるのかどうかという点がまず一つ目、そして、清国商人は1895年以降、いつ頃まで昆布輸出を実権を担っていたのかというのが二つ目の質問です。それに関して三つ目として挙げたいと思うんですが、この清国商人が牛耳っていた昆布輸出の実権に対して、例えば三井物産が再び昆布輸出に関与し、乗り出そうとしようとしていたのか、あるいは三井物産以外の商社が昆布輸出に乗り出そうとしたという傾向がみられたのかどうか、以上の三点ですね。これらについて、高木先生にお尋ねしたいと思います。ちょっと細かな質問で恐縮ですがよろしくお願い致します。

加納　はい、ありがとうございました。その他いかがでしょうか。

栗田　私は地理学とか民族学については疎いものですから、非常に新鮮に新鮮な思いで発表を聞かせていただきました。それで皆さんにお教え願いたいのですが、大旅行というのは、上海という大都会から地方に行くわけですよね。それは、ある意味では異次元の飛翔、あるいは日常からの飛翔を意味すると思います。皆さんのご報告にもありましたように、学生たちは、この飛翔のなかで、価値観の転換を迫られる場面に直面することもあったわけです。例えば、上海では日本は一流国だと思っていたところが、地方の農家に行ったら「日本って何だ」って言われてしまったりする。そして、自分たちが思っていたのとは異なる日本像が存在するということを痛感する。このような、大旅行の中で経験した、価値観の転換とか日本認識の変化といったものが、その後の彼らの思想とか、あるいは精神とかに、何らかのインパクトを及ぼしているのではないか、ということについて、ちょっとお教え頂ければと思うのですが。

加納　はい、ありがとうございました。その他いかがでしょうか。このお二方を最後にしてよろしゅうございますか。

質問者　東亜同文書院と聞きますと、自然と魅かれるものがあります。以前、大学院の中国研究科にいまして、フィールドワークのプログラムがあって、藤田先生や森久男先生の講義などを受け、事前調査した上でフィールドワークに入るということをしてました。ただその当時は、あまりちゃんとした教科書とか論文とか本とかが無くて、人の話を聞くだけでした。また、書院の研究って何をやってたのか全く分からなくて、後から色々勉強したこともあるんですけど、例えば波多野養作さんという方はピストル自殺されてるんですね。不遇のことですけども、憤慨して、最後はやっぱり上手くいかなかった。先輩たちの努力ですかね、当時の東亜同文書院っていうのは、今の時代とだいぶ違うような気がするんですね。例えば、経済学部で学ぶことなら経済原論とか、学説史とか、専攻研究を学ぶ上で大事なことってありますね。経済学の歴史の中で、例えばマルクスとかスミスとか、そういった基本的なことを学んだ上でフィールドに入っていったと思うんですけど、授業科目を見てますとそういうことは全くなくてですね、旅行したいというか、珍しいものを見たいというか。ただ非常に過酷な旅行になりますね。そこで、今の大学で中国語とか社会科学、あるいは人文科学を勉強する学生が、授業の中で何を教訓として学んだらいいのか、漠然とした質問で申し訳ないんですけど、そういうことを考えているんですが、どなたかお答え頂けたらと思います。

加納　はい、ありがとうございました。では楊先生、最後のご質問を。

楊　細かい質問なんですけれども。松岡先生にお伺いしたいです。途中からの参加でしたので、もしかしてご報告の際にすでに言及されてるかもしれませんが、資料のことなんです。その旅行集の31ページに、松岡先生の報告の中で、その写真の特集についてお話があったんですけれども。この上海の雑誌の『良友』と書いてあるんですけど、これは要す

るに1926年から45年までに上海で刊行された『良友』画報であるかどうか。そしてこれは34年5月から6月かけての特集なんですけれども。雑誌に載せた写真も含めて、その後もう一度37年になって単行本として出版されたかどうか、それに関連してお聞きしたいんです。このようなケース、四川省だけでなくて、他の地域にもあったかどうか、ちょっと本題から外れた質問で申し訳ないですが、よろしくお願いします。

加納　はい、ありがとうございました。色々とご質問、コメント頂きまして、これを今から各報告者のほうで答えて頂きたいと思っております。まず最初に頂いた大旅行調査の前提として、東亜同文書院のカリキュラムだとか、あるいは大旅行の準備期間がどうだったか、その後の進路のデータもちょっとあればということと、それから最後から2番目のご質問のカリキュラムが今の大学と違うんではないかというのは、ちょっと関連していると思います。藤田先生から合わせてこの辺をお答えいただければと思います。その他、個別のご質問、もう一つ、いくつか全体的な質問があります。我々のそれぞれの発表から近代アジアはどのように見えるのか、これ一言でお答え頂ければと思います。その他、日本像の価値観の転換がその後の彼らにどういうふうな影響を与えたのかとか、そういった点、時間の許す限りお答えを頂ければというふうに思います。時間の制約もございますので、一人当たり3分弱ぐらいですね。順次、発表順にまいりたいと思いますので、藤田先生からだんだんこちらに周っていただくというふうに、よろしくお願いします。

藤田　それではお答えします。カリキュラムの面ですけど、最初に出来上がった頃は中国語と英語を基盤にして、貿易実務関係の科目ですね。商業学とか、貿易関係、そういう科目が最初セットされます。その中に少しずつ内地から先生達が移って来られて、かなり幅広く、経済学など、社会科学全般的なことを、それから人文学も。貿易実務なのに中国の古典をやったりとか、そういう科目が並びます。高等専門学校になりますとまた個別の学問分野が入ってくるわけですけれど。内地からやっぱり集中講義で先生方が来られたりすると、内地の先生方が教える授業に対して、ちょっと自分たちも憧れをもつような人もおるんですね。そういうわけで、ずっと後半、大学昇格が近くなる頃になりますと、もっと面白い授業というような要望が書院生の方々から出てまいります。特に大学へ昇格する時にカリキュラムのほうで学生と大学外が協議をするわけであります。少し混乱もあったんですね。旧制大学というのは昔の文部省の認可というわけでもないんだけれど、ある基準がありますので、きちんとした学問内容がそろっています。それは当時の大学と同じ、やることなんです。いずれにしてもビジネススクールとしてスタートしましたから、そういう色彩が非常に強いです。途中からアカデミックへの指向性も強まり、それで高等専門学校。そしてよりアカデミックになってって、大学というかたちに発展していくという経過があったと思います。

それから大旅行への準備期間ですけど、最初の学年は外務省から謝金が下りたっていうんで、すぐ6月から1か月で準備して7月にはスタートっていう。学生はアハアハしてたんですね。すぐ行けるみたいな感じで行っちゃったんですね。それは例外ですね。次の年からは、みなさん上級生、中級生、下級生、同じ部屋に学年が違って住んでますから、皆の様子がみんな分かる。だから上の人たちが下の学年に教えてくことになります。だから帰校した時から、次の学年はもう準備期間です。また大旅行からの帰校学生は、秋に帰ってくると、すぐにもう報告書作りです。現地でいろいろ書いてきたメモや資料を使い、それで3月の時に提出すると。だから卒業論文ということになったんですね。20期ぐらいになるとコースをほとんど行きつくしたと言うとちょっと大げさですけど、コースがダブることが多くなったんで、下級生がまたこのコースを通るかもしれ

ないというわけで、コースの様子を書き留めるというか、そういう日記が出てくるわけですね。だから皆さん、調査報告書と旅行日誌、両方課せられて、これは大変だったと思いますね。美濃紙の薄い用紙にカーボン紙を入れて、最低二部作るんですよ。先ほど陸軍に送られたとか、いろんな松岡先生の話がありましたけど、基本的にはカーボン紙でやるわけですが。二部、あるいは多くて三部ですね。それが限界です。一部はやっぱり書院に置いて、もう一部は東亜同文会、東京ですね。そこに基本的にはきちんと置かれていったと。あといろんなのがチョコチョコとあります。それから私がずっと字面を見てると、同じ人が写し書いてるっていうケースがありました。したがって、これはちょっと面白そうだっていうのは、もう一部作った可能性があります。書院生の方にお聞きしても、だいたい二、あるいは人によっては一部作成とていうお答えが多いですね。だから報告書がいろんなところへ流れたんじゃないかっていうのは、やっぱり噂が発展したもんじゃないかなと思ってます。例えば、軍部が読むことは読んだ可能性もあるかもしれませんけど、読んだんならもっと役立ってるはずでねという気がいたします。

それから進路ですけど、一番最初は日本の資本も清国へ入ってません。三井が最初に出てきます。そのぐらいで、ほとんどは日本人の経営の所へ行こうと思ったって採用はないわけです。当時の根津院長は、基本的には自立をすすめました。今ようやく日本の中でも流行りになってきた「業を興す」。学生諸君、やたらにどっかへ就職するんじゃなくて、自分で業を興す。だから根津院長の素晴らしい所は、自分で業を興しなさいというわけで、上海で牛乳のメーカーとなり、ヒットしたとか、大きいところは鉄鋼会社もやってるんですね。中日（新聞社）から出した本の中に少し紹介しましたけども。そういう自立でやってくっていうところは前半の卒業生に多い。途中から日本の企業が入ってきたりしますし、中国の企業も遅ればせながら発展していきますと、そういうところへ就職してきます。なかには中国の商店に入ってって丁稚奉公して、きちんとこの商慣習を勉強して自立し、成功したという人も出てくるわけですね。やっぱり商業界ですね。大きな物産会社、何とか商事というような大きなところにたくさん入ります。それと金融ですね。それからいわゆるジャーナリズムですね。これが非常に多い。ジャーナリストが非常に多いですね。それから教育の世界、先生になってる。だからずっと後半になってくると大学の先生にもなった人が出てきます。私の勘定した戦後の記録では、教授になった人が84人おります。そういうところが主流ですが、その他、非常にバリエーションに富んでます。

戦後外地から引き揚げてきて、愛知大学には書院の人たちがどさっと入りますけど、それ以外の人たちも文部省のすすめで入ってくるわけですよ。その学校が八十いくつあるんです。外地に行った高等専門学校、大学等含めてですね。そういう意味で言うと愛知大学は書院を中心にした引き揚げ総合大学と言えます。東アジア総合大学と言いますが、そういうかたちで成立したんですね。そういう人たちが卒業後、（19）60年代以降の高度経済成長期の時には真っ先に活躍してる。日本人が外地に市場をずっと確保していく時にも、例えばインドで新しい取引を三井物産がやろうという時に、最初に手をあげたのは書院の人たちですね。ほかの人は行かないです。そういう中でパイオニア役を果たしたのですね。当時中国との関係は「竹のカーテン」でダメでしたから、書院生は香港・台湾ぐらいで活躍して、あるいは南のシンガポールのほうへ行ったりします。さらに中南米とか、中近東とか、アフリカとか、東南アジアもそうですけど。世界へ頑張って出ていった人たちが非常に多いですね。そういう人たちの実績でもって、日本の貿易関係の企業が非常に発展したわけですね。だから高度経済成長を支えた人たちに、かなり書院の卒業者が多いんです。戦後、帰国した書院の人たちはスパイ学校出身だなんて、風評で言われたため、口を開かなかった

ですね。何言ったって、一方的なイデオロギーでそういうふうに思われちゃうっていうわけですから。したがって、当時の週刊誌は、書院卒の活躍した人たちには「幻の名門校」という肩書をつけたんです。幻の名門校、東亜同文書院と言ったんです。そういう週刊誌見てください。みんなそういうふうに書いてあります。そこで私は幻ではなく、その実態っていうのを示そうということでやってきたんですけどね。もちろん、戦前まで東南アジアで活躍していた日本人もたくさんおられて、そういう外地の経験者が、戦後の引揚げ後の高度経済成長を支えたと思ってます。日本の土着の人ではなくて、外地を知った人。

したがって今後も、日本が発展するには、外地を知った人がいないと上手くいかんだろうと思います。だから今の学生諸君は、どんどん外へ出ていって、外から日本を見たときに、長所や短所など、いろいろな特徴を知ってもらう。そういう特徴をやっぱりグローバルな目から見てもらう。書院の人たちは外から中国と日本を見てる。それは共通しますね、ある意味では。戦後の日本の経済成長っていうのは、書院の人たちがいかに貢献したかというようなところを少し明らかにしていきたいなというふうに思ってます。

それからもう一点、馬場先生のお話。私は分裂と統合というか、それは破壊と近代化、一言でなくて二言になるんですけど。対のことですね。例えば、清末もそうですけど、辛亥革命の混乱によって破壊して新しいものを作り出す。しかし、新しいものと孫文中心にというわけにもいかなかった。その後、軍閥になって、軍閥同士のものすごい争いで潰し合いがある一方で、今日もお話しましたように、軍閥の中には近代化路線で一生懸命地元のために貢献してくれた。中国の近代化の原点にはやっぱり(そういう)貢献した人たちがいて、戦後の新しい中国のなかでもモデルになってたんじゃないかなっていう気もします。そういう意味でいくと、一言でいうと、破壊と統一、破壊と近代化、その対の二つ。張本人がいらっしゃいますから、それはまたご本人にお答えいただいて。

加納　はい、ありがとうございました。背景についてもご説明頂きまして、これでお終いでもいいかなと思いましたけれども。それぞれの個別のところも含めて、各発表者2分ほどいきたいと思います。順番にまいりますので、東南アジアに関しましては、馬場先生からのご質問で、沿海部が多かったんだけれども、どうして東南アジアに行ったのか。私が今まで何となく分かってきたところで言いますと、まずは沿海部の延長だったということがあると思います。というのは、沿海班という名前を付けたのがけっこう東南アジアにも入っていて、特に東南アジアに入っているのがほとんど沿海部ですので、そういったところはあるだろうと。それからもう一つは南進との関連。ビルマに関しては偶然行っちゃったっていうことはあるんですけれども、それ以外のところは意図して行っていますので、これは日本の南進との関連ということがあるだろうというふうに思います。それと関連して、近代アジアは大旅行記録からどう見えるかっていうと、基本的に日本人の関心がどういうふうになっているのかというのは読み取れる。一言で言えって言われれば支配と現地との関係がどういうふうになっているかというのを、彼らは関心をもっていたということは読み取れるだろうと思っています。それから、栗田先生からいただいた質問の「日本像の転換がその後の彼らに与えた影響」ですけれども、そこに書いてあることで言えば、植民地支配を実見していくということが彼らにとっては非常に大きかったろうというふうに記録からはうかがえます。そういうことからいくと、カッコ付ですが、いわゆる「東亜の解放」という考え方と結びついていくということがいえるだろうと思います。結局、その後、藤田先生がおっしゃったように東南アジアも含めて、東亜同文書院の卒業生たちが各地で日本企業の先駆けとなるんですね。各地で活躍されていた。私の知り合いの方も、今愛知大学の提携校にな

っている大学の先生で、東亜同文書院の出身者の息子さんがいらっしゃいますけれども、その方もずっとタイに進出した日本の商社で活躍をされた方でして、そういうようなことは非常によくあったんじゃないかなと思います。

松岡　私は中国の本質は内陸にあると思っています。沿岸部は非常に発展していて調査も進められていますけれども、内陸部はまだ多くの空白部分があります。また例えば、調査コースの地図を見たときに、ある線はどんどん太くなっていきますね。東亜同文書院の学生にとって、線が太くなる、自分たちがまたそこを歩くというのは、ある意味内心忸怩たるものがあると思うんですね。彼らの一番いいところは、フロントランナーであることだと思います。未踏の地を切り拓く力、誰も行っていないところに行きたい、その気持ちに私も凄く感動します。それを今、愛知大学の学生は学ばなければいけないと思います。ですから、学生たちも本当はあまり太くはしたくなかったと思うんですね。できれば真っ白な所に行きたかったっていうのが彼らの気持ちだと思います。ですから27期の学生が陝西省を選び、あるいは山西省に行きたいと言った時に、そこは飢餓と土匪とアヘンの地でとても危険だから行くなといわれて、それでもあえて初めての地に足を踏み入れた、その気持ちがよくわかります。ですから、なぜ内陸なのかっていうと、内陸こそ行かなければいけないと思ったということでしょう。学生たちにとってみれば、四川に行くには、まず長江を遡って重慶まで行って、それから徐州を経て、雲南に行って、四川に上がるというのが最も普通の水路で行けるルートだったのです。それが推奨されていたのだと思います、安全ということから考えて。大旅行記を読むと、学生にとって成都は西の果てなんですね。ところが27期の学生はその先の「内陸」をめざしたグループでした。私は四川に留学して、その後もずっと四川の辺境の少数民族を調査してきましたので、成都は西の果てどころか、ここから始まるという感覚があります。学生たちの調査ルート地図の西の方を見てください。真っ白です。中国はもっと西にも広がってます、という気持ちが私にはあります。多民族国家という認識が当時はまだ薄かったのだろうなと思います。民族研究の立場からいうと、1930年代の資料は、非常に欲しい。喉から手が出るほど欲しい資料です。それは1950年代以降になりますと、中央政府は民族を56に確定します、漢族と55の少数民族です。ですが56という数字は、民族識別工作を経て人為的に確定されたものです。ですからこの56という民族集団から民族研究を始めることにはかなり無理があります。そのような政治的な分類が行われる以前の資料はとても重要です。人民共和国になっていろんなことが変わったと言われていますが、実は習慣法は根強く意識されていて、日常生活にはしっかり伝えられています。そういう社会の内面を調べていくには、1940年代以前の資料が重要で、書院生たちの記録には彼らが自分の目でみて体験したことがたくさん記されていて、発見がいくつもあります。

増田　私は地理学出身です。書院生が雲南省をなぜ選んだのかっていえば、やっぱり雲南省の地理的位置が一番大事だと思います。というのは、雲南省は中国の他の省からは鉄道が入っていませんでした。当時(1910年)、それがベトナムのファイホンとハノイから鉄道で雲南に入ることができるようになった。そこが12期生の一番の見どころであり、鉄道が近代化の象徴であると私は思っています。

12期生大旅行誌『同舟渡江』の雲南班の中に、次のような記述があります。7月28日(1914年)蒙自へ訪れた時、ここは鉄道開通前は一つの開市場にして、雲南省に至る要路にあたるところであるが、鉄道開通以来は唯名のみ、さらに人口が2万有余あったのが年々徐々にさらに減っている傾向がある。フランス租界において、その街はすたれ、滅んでいく様子が描かれている。鉄道は近代化の象徴として拠点は栄えるが、通過市は廃れていくといのが、

12期生のとらえた状況です。

武井さんの質問で、大旅行誌の中で雲南地方を旅行した班はもう一つ、ファイフォンから鉄道で入った25期生です。これは今日のレジュメの17ページに、藤田先生の発表で昆明から楚雄までのコースで、幹線道路を通ったのが12期生で、山間僻地を通ったのが25期生じゃないのかと私は思ってます。ベトナムのファイフォンから入ったのは、私が資料で読んだところでは2つの期生があったんじゃないかなと思うんですけども。以上です。

高木　武井先生からご質問を頂いた、三井物産が昆布輸出に乗り出したのかということについてお答えします。時代背景を説明しますと、明治20年代の後半になってきますと、日本の漁業は遠洋漁業のほうへ舵取りをしていきます。「遠洋漁業奨励法」という法律が明治30年に出まして、その頃から段々と沖合、遠洋漁業が志向されていく。静岡県の水産試験場が「富士丸」という動力船を造ったり。そのような時代になっていきます。そして、漁船の大型化、動力化や、漁場の拡大が進んで行く。沿岸漁業というよりも、どんどん遠洋化していくという時代であったということです。商品のほうに関しても、僕はその後の書院生の大旅行記録をしっかりと読んでいないので、昆布がいつ頃まで商品としての需要性があったのかという点については断言できないのですが、この頃からじょじょに缶詰をたくさん作るようになりました。缶詰をアメリカへ輸出したり、ヨーロッパへ輸出したりと。ですから、三井物産のその後のデータを少し見たことがあるのですが、三井物産も缶詰のウェイトが非常に高まっていきました。

華僑の問題は分からないですが、函館の華僑は戦後も力を持っていたことからどうかなと思いますし、先ほどの発表で説明したように昆布から塩魚やスルメが増えていった。その商品の変化と華僑との関わりを調べていくと面白いのかなと思っております。近代アジアということですけれども、一つの商品を手掛かりにいろいろなものを見ていくと、時間の変化によりどのように変わったのかなど、多くのことが見えてきて面白いと思います。昆布を題材にしましたけれど、他の商品を見ていくとまた違ったものが見えてくると思います。経済地理学ではないですが、そういった観点から見ていくことを今後の課題としたいと思います。以上です。

暁　まず馬場先生のご質問なんですが、近代アジアというもの、これは非常に難しい問題だと思います。近代とアジア、日本の近代だったら明治維新、中国だったらアヘン戦争、今日の発表のモンゴルといったら、外モンゴルと内モンゴルもまた違います。非常に難しい問題なんですが、一言でなかなか片付けることができない。あえて一言でいうとやっぱり変遷と変化だと思います。その変遷と変化を書院生がどういうふうに記録してきたか。その内容によって近代モンゴル、あるいはアジアが浮かび上がってくると思います。例えば今日の発表の中で、近代交通網の整備と言うことで、清末期の内モンゴルに鉄道が通過していない時期の記録と、その後の20年代の鉄道が通過した後の変化とか、こうした現地状況を書院生が記録しています。こうした記録を比較して、その地域の変化をどういうふうにとらえるかというのは一つの重要なポイントじゃないかなと思うんですね。今後、自分の課題でもあるんですが、これは若干、栗田先生のご質問と関連すると思います。満鉄に入った書院の卒業生が多いことで、彼らはいろんな著作を残しています。その満鉄調査報告書と学生時代に書いたものと比較すると、その方法論の変化はどこにあるのか、あるいは価値観がどう変化したのかという、それを追跡していきたいと思います。

ウリジトクトフ　近代日中関係史の中に、あるいは日本とモンゴルの関係史から見れば、モンゴルに関わった日本の機関とか団体とか、というのがいくつかいます。同文書院がその

ひとつで、あとは満鉄とか、関東都督府とか、モンゴル関連の領事館とか、等がありまして、また、興亜院蒙疆連絡部、特務機関というのもありまして。あとは善隣協会もありますね。その中にはもちろん領事館とか色々ありますけれども、一部分は軍隊、一部は政府、一部は民間で、一部は個人的にやっていますね。中国での研究はその時代の影響で、日本といえば皆同じような、そういう研究論文とかが多くいるんですが、実は別々に区別して研究する必要があるんじゃないかと思いますね。

東亜同文書院としてみれば、内モンゴルに関わったもう一つの善隣協会というものがありますね。それを作ったのは最初個人的な意図で、内モンゴルで旅行して、始めは毎年内モンゴルの2、3人の子どもを日本に連れてきて、学校に通わせていたんですね。30年代になると善隣協会になり、文化活動としては色々やったんですが、研究者の間では批判されることもよくありますけど。これと同じように、同文書院をどう見るかと言うとちょっと難しいんですけれども。私のほうから見れば、日本には民権運動とか、そういう伝統もありますので、区別して見る必要があると思いますね。

同文書院生が旅行中においては、何を思い、何を感じていたのか、などの問題に関してはですね、書院生はモンゴルだけでなくて、中国で色々大旅行をしたんですけれども。旅行していた学生たちは、もちろん具体的な一人一人の中国人とか、モンゴル人とかに会った時の気持ちから見れば、それはやっぱり優越感を感じていたんじゃないかとは思いますね。優越感というのは両面的なものなんですけど、人間の弱点とか優点から見れば、それがいい方向に変わる可能性もあるし、悪い方向に向かうということをはらんでおりますから。民間とか個人的な行為は複雑なその時代の中で自分なりの生きる道とかがあるのでしょうか。それは・・・私にとっては、何かによってその中に巻き込まれてしまうのが普通じゃないんですかと思いますね。同文書院について私は初めてなんで、あまり深い研究をしていないんですけども、これからどんどん読んで勉強していきたいと思います。

加納　ありがとうございました。それでは司会の不手際で10分ほど延長してしまいましたけれども、東亜同文書院の大旅行でこれだけの論者が集まってシンポジウム開いたのは、初めてですね。藤田先生がずいぶん長いこと種をまかれた成果が花は必ずしも綺麗じゃなかったかもしれないですけれども、一つの花畑ができていったのかなというふうに思っております。これについては、先ほど宋先生からもありましたけれども、世界への情報発信の一つとして、ここにいるメンバープラスアルファでぜひ論文集にして、2、3年後にはこれを世に問うていきたい。その時の一つの方針としては、これはおこがましいんですけれども、藤田先生の「中国を越えて」というのを、さらに超えていくという方向で考えていきたいと思います。もう一つは、宋先生も言われたことですけども、若い人が少ないという点です。若い人が、ここにいるメンバーも若い人も入っているわけですけれども、あとは学生さんですね。そういった人を巻き込みながら、この大旅行っていうのがフィールドワークになっていく。

現在も愛知大学では現代中国学部や国際コミュニケーション学部等、フィールドワークという授業を持っていて国外に行っているところが結構ございます。これは愛知大学としては「愛知大学のDNA」だという言い方をしているわけですけど、そういったところも伸ばしながら、若い人への教育、研究に役立てていきたいなと思っております。本日は朝から午後5時過ぎまで長い間どうもありがとうございました。これで終わらせていただきます。